

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 沈 仁慈

沈仁慈氏の博士学位請求論文『慈雲の正法思想』は、江戸時代の仏教改革者慈雲飲光(1718～1804)について、その思想を総合的に研究したものである。そもそも江戸時代の仏教は、長い間墮落仏教という烙印を押され、正当な研究対象と見なされなかった。そのため、きわめて多数の著作を残し、当時の社会に大きな影響を与えた慈雲飲光についても、その思想を学問的批判に耐えうるだけ十分に検討したものはほとんどなかった。このような中で、沈氏の研究ははじめて慈雲の広範な活動を「正法思想」という観点から統合的に把握し、慈雲の再評価のみならず、江戸時代の仏教全体に対する見直しを要求するものである。

本論文の主要部分は、全5章からなる。第1章「慈雲の生涯と著作」では、さまざまな伝記資料を渉猟してその伝記を明らかにするとともに、多数に上る著作を分類整理している。第2章「慈雲の正法思想」では、慈雲の活動の根底をなす思想を正法思想として捉え、はじめは仏在世のあり方に戻るという運動であったのが、晩年に神道を研究してからは、自然のありのままを重んじるように転じたことを論じ、その全体を貫く特徴として、古風の重視、実践の重視、超宗派的態度と諸思想の摂取ということを挙げている。また、伊藤仁斎の古義学の影響にまで説き及ぶ。第3章「仏教復興運動」では、正法思想の中心となる仏教復興の実践について、仏知見の実践、仏戒の実践、仏服の実践、仏行の実践の4つの観点から捉えている。第4章「戒律復興運動」では、その仏教復興運動のまた中心となる戒律復興運動について検討し、戒律の宗派化を否定し、持律を重視し、僧団内に新たな身分を設けて実践的な教団を作ろうとしたことを論じ、さらに南都の戒律の伝統と比較しながら、従来の復興運動よりさらにより古い伝統に戻ろうとしたその立場を明らかにする。第5章「民衆教化運動」では、十善による民衆教化の活動を検討し、仏教の世俗への適応という側面を明らかにする。さらにそれを江戸時代初期の仏教世俗化論者鈴木正三の場合と比較し、慈雲のほうがより普遍性を持った世俗化のあり方を提示していることを述べる。

以上の5章によって、慈雲の広範な活動は、はじめて総合的に理解されるに至った。もちろん慈雲の活動はきわめて多面的で、いまだ刊行されていない著作も多い。梵学研究や雲伝神道と呼ばれる独自の神道説など、それ自体として今後さらに研究の余地は大きい。沈さんの研究はそれらの一々にまで亘るものではないが、少なくとも「正法思想」という大きな統一的な視点からそれらの活動も理解できることを示した。また、慈雲だけに限定することなく、仁斎や正三、さらには戒律の伝統にまで遡ってその思想的な位置付けを明らかにしようとしており、仏教研究のみならず、江戸時代思想史全体に対して新たな観点を提供するものとなっている。一部の形式的な不備などあるものの、大きな成果であり、博士(文学)の学位を与えるにふさわしいと判断する。